

総 説

「感染症の言説史」に向けた 先行研究の検討

—コレラの流行に着目して—

宮 前 健太郎

Abstract

This study aims to examine the history of infectious diseases from a sociological perspective by reviewing existing research and identifying remaining gaps in the field. The history of infectious diseases is long, and extensive research has been conducted over the years. In Europe, instances like the plague outbreaks have historically led to shifts in religious authority and social structures. Understanding the nature of viruses is also crucial in contemporary society, especially in the context of the Covid-19 pandemic.

In Japanese society, significant periods in the history of infectious diseases range from the early modern era and the Edo period, through the Meiji and Taisho eras, which saw the rise of bacteriology. The spread of cholera during these times is particularly noteworthy. Upon reviewing relevant literature, we found that there is a lack of research capturing the experiences and perspectives of those directly affected by infectious diseases, especially among non-experts.

1. 研究背景

本稿の目的は「感染症の言説史」に向けた先行研究の検討を行うことである。Covid-19の世界的パンデミック以降、日本国内でも感染症の歴史に関する書籍の出版が相次ぎ、史実から得られる知見を活用しようとする動きが盛んになってきた。本研究ではそのような動向を踏まえ、感染症の歴史、特に日本国内を対象にして行われた研究群を例示することを通してその不十分な点、補うべき部分を検討したい。

人類史における感染症の起源は非常に古く、紀元前の天然痘罹患より現代に至るまで社会とウイルスは共生を続けてきた。たとえば、中世ヨーロッパのペスト流行は既存社会の基盤になっていた宗教的な教皇の権威を失墜させ人間（科学）

中心の思考を要求したように、ほぼ全ての社会で感染症と社会変動はつながりを持ってきた。ただし日本国内における感染症の中で最も規模が広範だったのはおそらく19世紀末におけるコレラパンデミックである。例えば1879（明治12）年におけるコレラ流行は確認されているだけでも10万人超の死者を出し、それまで社会の中で支配的であった個人ベースの健康管理（養生）の限界を露呈させ、後に「衛生」概念が社会に浸透していく契機となった。

たしかに日本社会における感染症問題についてはコレラのみならず、ペスト、赤痢、天然痘、梅毒など多くの種類があるが、中でもコレラの特徴は特異といえる。医学史学者の立川昭二（1971）の整理によれば「コレラは衛生の母なり」という文言が内務省衛生局を中心とする関連資料に残されている記録があり、のちの大日本私立衛生会の母体となる東京府（当時）の中央衛生会も府内におけるコレラ流行への危機感から設立されたものである。コレラの特徴として約3日で死に至るという致死率の高さや水道を通じた感染経路の拡大のしやすさなどがあり、また船舶交易で外国から輸入された未知の細菌であったがゆえの対策の立てにくさなど多くの厄介さがある。

以上のようにコレラを事例として扱うことの理由としては、「コレラは衛生の母」とのちに皮肉を込めて指摘されたように、単にそれが感染症として危険なものであるというだけではなく、特に日本社会においてどれほど大きな社会変革のきっかけとなったか、という基準での選定を行ったということがある。

感染症は当該社会に否応なく変化、改善を要求する出来事であり、その検討は単なる史実確認を超えてさまざまな社会課題の解決に通底する、非常に有意義なものといえる。その最たる根拠ともいえるのが、2020年代に世界中で経験されたCovid-19のパンデミックであろう。人類史上最大ともとれる感染症¹⁾を経験した現代社会にとって、過去に起きた類似する出来事を読み解き次代に活かす試みは必須のものである。以上のような問題意識のもと、残されている研究群の検討を行ってみたい。

2. 分析

本節では前節で示した研究課題に従い、概ね二つのパートに分けて各文献の検討を行っていく。大まかな内容としては、病気と宗教（因果に基づく理解や祈祷）が密接に結びついていた近世、具体的にはまず江戸末期までのコレラパンデミック以前の感染症に係る言説に関する先行研究を概観したうえで、衛生の概念が欧州社会から輸入され政策の指針として活用されるようになった明治期以降について、コレラパンデミックに係る先行研究を中心に整理していく。

2.1 近世

近世（江戸期）の医療や感染症を対象にした研究には鈴木則子（2022）、海原

亮（2007）、朴炳道（2021）などがある。

鈴木則子（2022）では『焼き場混雑』などの図版資料とともに江戸期のパンデミックが論じられている。そこでは感染症そのもののパニックのみならず、感染源としての下層社会の扱われ方や感染を恐れる障害者などの社会的弱者のステイグマなどが活写されている。ただし氏の研究では漢方医、蘭方医の抱えた困難が「非力であった」（鈴木 2022: 209）という整理のみで置かれ、いつ頃から、どのように限界を迎えていたかという詳しい整理がなされていない。

海原（2007）では江戸時代の人々が病をどのように認識し克服したか、という問いが町民や医療従事者、地方政府（藩）といったアクター構図の中で明らかにされている。海原によれば既存の近世医療研究は多くの部分を医師にフォーカスしていることに不備があり、受容側の視点に立った考察を要求している。また藩医、陪審医といった医療者側もそれぞれに社会性を持っており、医師育成制度が学派をまたいで成立していく様子などが明らかにされている。ただし海原の研究の場合、近世において医療と密接な関わりを持っていた宗教的な要素がほぼ勘案されておらず、医療という行為が公的な諸制度の中だけで整理されてしまっている部分に問題がある。

朴（2021）では感染症も含めた「災害」概念の再検討が行われ呪術、終末、慰霊、象徴という四つの分析軸が示された。これは災害の既存研究において事態としての災害が軽視され細分化が求められている背景に基づく理解である。災害は死者の発生を通して終末を想起させるのみならず、被災地において当事者たちが助け合うユートピアの契機ともなりえた。ただし朴（2021）の場合、災害の一区分の感染症を図版（絵）に基づき心性として検討するにとどまり、病気に相対した住民の視座のみから考察が行われていることに不十分な点がある。

2.2 明治以降

近代以降の衛生事業、思想の内実はいままで、多くの研究が蓄積されている。代表的なものだけでも竹原万雄（2020）、小林丈広（2001）、宝月理恵（2010）、小野芳朗（1997）などがある。

竹原（2020）は感染症流行における生命の危機に照準し、そこでどのような対策の変遷が生じるかを明らかにしている。これは竹原の研究のみではないが、衛生事業が明治期以降に整備されていく中で警察の強権的な介入が問題となったことは氏の研究の重要な論点になっている。地域社会の衛生が公的に整備されるようになったのは医制（明治7年）以降のことであるが、この際に内務省衛生局や府県衛生課が設置され、巡視などの情報収集ネットワークが体系化されている。ただし、衛生行政機関によって収集された情報を感染症の抑止に結びつけていくことは容易ではなく、ダイレクトな介入手段として警察²⁾が多くの実行に関わってしまった事実がある。また、衛生行政機関によって収集された感染症の詳細情報も、単に治療法の探求を目的として用いられたわけではない。発足後まもない

明治政府にとって感染症を深く知り、その解決策を社会に示すことは自身の支配権能を誇示するという政治的課題にも応用されてきたのである。

近代日本にとって、死者数、罹患者数の観点からも最も大きな問題となったのはおそらくコレラの流行であろう。しかし竹原の研究対象はあくまで「感染症対策」の包括的な形成過程（ひいてはそれに基づく日本社会の近代化過程）にあるため、後半部にかけては赤痢などの感染症も事例として言及されている。この点に関しては、研究としての長所であり、同時に短所でもあると指摘しうる。たとえば山本俊一（1982）などの「コレラ史」研究では、あくまで単一の感染症³⁾を対処にそれに対する社会の変化、趨勢をたどっているが、竹原の場合そのような一貫性が見られず、通時的な「近代化過程」がどの程度描写できたかはやや疑問が残る。

感染症を通して日本の近代化過程を確認する試みを行った研究者に、同じく小林（2001）がいる。小林の研究はコレラの流行が社会や行政、人々の意識などに与えた影響を歴史的な意味という観点から考察するものであり、中でも特にクワランタイン（家屋検疫）が事例として重視されている。コレラ流行の際、交通の遮断（隔離）が必須事項となることは感染症としての特質を鑑みても明らかである。ただし、近代化まもない日本社会にとって消毒、隔離事業を進めていくことははじめての政策であり多くの文化的摩擦を伴った。この辺りについてはいわゆる「民衆史研究⁴⁾」などにも研究の蓄積があるが、特にスラム（貧民部落）などを対象とした交通遮断は特定階層の人々に対する差別につながり、時に騒動（コレラ一揆）などを発生させた。小林はそういった歴史的な趨勢を踏まえ、摩擦とそれに対する解消、といった部分までを範疇としている。具体的にはコレラ流行を踏まえた衛生組合、委員会の設置に始まり、暴動を問題視しての啓発事業、博覧会といった文化装置の役割などが明らかにされている。

小林の研究に対する疑問点であるが、まず啓蒙の様相を考察する中でそれに関わった啓発者（衛生学者や官吏）による立場性が十分には勘案されていないことなどがある。途中、「啓蒙の言葉」との節が設けられ特にスラムで行われた教化活動などが照準されるが、そこで言及されている事例は少数の張り紙の内容程度であり、いつ、どこでどのような文脈や理念のもとで啓発が行われてきたかといった視点は不足している。

「衛生の展開と受容」を扱っている代表的な先行研究としては、宝月理恵（2010）による検討が存在する。宝月はバイオポリティクス（生の政治）概念を中心に、そこにブルデューのハビトゥス論を織り交ぜることによって、近代日本における衛生の展開と受容を捉えている。言い換えれば、近代日本における諸制度や道德教育がいかに衛生実践の中に組み込まれ、社会の成員たちを「よりよく生かす」方向に働いてきたかを明らかにしている。それは制度史と当事者たちのオーラル・ヒストリーの両面から読み解かれた精緻な論考と言える。

しかし、宝月の論考にも疑問点が残る。例えば、「展開と受容」を論じるにあ

たつて、そこではメディアや学術団体の働きがほとんど言及されないまま論考が閉じられていることがある。宝月は第二章で衛生整備に関わったテクノクラート三人⁵⁾を挙げているが、彼らの衛生思想の内実やその背景についての詳しい言及はなされていない。

さらに、「清潔の近代」という問題関心のもとで衛生唱歌などの検討を行った小野芳朗（1997）などの研究もある。小野はコレラ流行による社会の危機と、それによる衛生意識の誕生を論じつつ、かつ清潔の過剰追及による弊害についても言及している。ただし、氏の研究の場合コレラ抑止の動機が「先進国としてのステータス」を保つという要因のみで説明され、感染症に直接関わった当事者たちの恐怖などについてはほぼ勘案されていない。

加えて日本におけるコレラ禍を扱った研究としては、コレラ流行を「近代化の一現象」として捉え、衛生改善をないがしろにした自治体、行政を批判した立川昭二（1971）、詳細な史料収集によって関西における監視・敵視を描いた安保則夫（1989）などが存在する。安保はミナト神戸（当時）を対象に「不潔な者たち」というラベルが伝染病という危機のもとでいかに形成されるかを明らかにし、立川はコレラ騒動の実証的な史料収集を通して、衛生行政に対して生じた無理解や事件などの発生プロセスを描いている。

先に挙げた二つの研究は公文書を中心に扱っているが、金川英雄（2020）のように当日日誌や当時の文芸からコレラ禍に迫る考察も近年では行われるようになっていく。またフィールドはやや異なるが、コレラ災害を朝鮮社会や欧州社会の転換点として捉えた申東源（2015）、見市雅俊（1990）による「身体と医学の歴史」研究も興味深い。金川による研究は隔離病院を中心に患者の逃亡のような生活実情を探り、申の考察はコレラ禍による民衆の混乱とそれに付随する俗話、医療機関や医療者の病気観といった諸要素を正確に描き出している。見市らが行った検討は「バイオの権力」の視座を編み込みつつ、疾病観や都市衛生のパラダイムシフトに迫るものだ。

こういった先行研究によるコレラ史への学術的貢献は、言うまでもなく多大なものである。しかしそこにはまだ十分に開拓されていない部分も存在する。例えば「騒動」や「一揆」を捉えるにあたって、それが発生場所や発生件数という文脈で捉えられることはあっても、当事者たちの病に対する、体験や意味づけといった生活意識の側面はやや軽視されている。確かにそれらの付置はコレラに伴う弊害の生起や収束を理解する上で有益だ。しかし事件記録の収集のみでは当該時期における住民たちの恐怖や混乱を十分に捉えることまでは難しい。伝染病をめぐる社会の混乱を考察するのであれば、前提として彼らの、病に対する意味づけの世界を深く知る必要がある。この点については、以下の結語で再び総括をしてみたい。

3. 結語

本稿ではここまで、感染症の歴史に対する諸研究の不十分な点、残された課題を検討してきた。最後に一連の検討を踏まえ、全体の総括を行いたい。

まず、主要な検討対象とした二つの時期区分についてであるが、感染症という現象を捉えるにあたって当該時期、社会の性質が色濃く反映されている点に注意する必要があるだろう。近世、江戸期に見られた感染症の理解フレームとして中心をなしていたのは、いわゆる憑依¹⁾や祈祷のありようである。たとえば朴(2021)のように、感染症に相対する人々の恐怖、救済願望が「神」などを活写した版画から読み解かれていた。近代以降の感染症研究の世界では、全てではないにせよこういった視覚、図版を通した理解は下火となり、主に言説、テキストを通した感染症体験の再現が主流になっていく。そして近世感染症の研究の中でも海原(2007)などの研究は数少ない、地方行政史(藩をめぐる文書)などが参照されている事例であるが、その中では逆に当時支配的であった宗教的な感染症理解という視座は後退してしまっていた。

では、近代、具体的には「衛生」概念が輸入されて以降の日本社会を事例とした感染症研究には、どのような傾向が見られたかを概観したい。長与専斎の「医制」策定以来、日本では個人の健康ひいては生命は養生の枠組みを離れ、社会の財産として管理保護される対象となったがその理解には困難が伴った。ここでいう困難とはコレラ一揆に見られるような、前時代的な心性と新興的な思想との衝突である。竹原(2020)などに代表される論者たちはその摩擦に照準し、社会すなわち病気を防ぎ統制する側がいかに啓蒙などに腐心してきたかを明らかにしている。こういった研究は、ひいては日本社会の近代化プロセスを明らかにする成果として重要視されてきた。

ただし、竹原(2020)、小林(2001)などのいわゆる近代化論の流れをくむ感染症研究は、それぞれの説明の内実、手法の中で細かい問題点を抱えていた。それは前節で個別に説明した通りである。概して感染症の種類が多義化していることによる一貫性の揺らぎ、感染症に直接関わった患者、罹患者の立場への照準の不足、啓発者たちへの個別の言及の少なさなどにまとめられる。

ではこういった近世、近代期の感染症研究の趨勢を踏まえ、今後どのような研究が求められ、どのような意義を主張すべきなのかという部分について最後に総括をしたい。まず、ここで前提となるのは冒頭で述べたように感染症をめぐる研究自体が、今日、Covid-19の体験という歴史的な出来事の中で非常に現代に通底する、あるいは改めて検討する必要のある課題になりつつあるという問題意識に立脚した本稿の立場である。

Covid-19の感染拡大の中でも、たとえば「アマビエチャレンジ²⁾」のような神仏への帰依、祈祷現象が見られたことは記憶に新しい。すなわち近世の祈祷を中心とした感染症体験を、現代における感染症理解の始まりとして位置付ける試み

も興味深いテーマとなるだろう。感染症に対して、なすすべがない状況で住民、罹患者のみならず、医療従事者までも含んだ社会の中におけるやりとりが、医療の限界とはなんだったのかという視点も含めて包括的に検討され直す必要がある。その上で、近代への移行期、社会において主流な考え方が感染症に限らず、労働や居住といったものまで波及し変異していく中で、どのようなメリットとデメリットが生じ現在につながる思想が形成されていったのかを、本稿において指摘した細かい考察の不足部分を含め丁寧に補っていくことに既存の先行研究を検討することの意義が見出される。

[注]

- 1) 論文冒頭で中世ヨーロッパのペスト流行について述べたが、現代社会におけるCovid-19も社会に変容を迫るものとして例外ではない。ロックダウンや検査のような聞き慣れない衛生対応が日常的になったのはもちろん、zoom会議を通じたオンライン生活の日常化、航空機の利用自粛を通じた地球環境の意図せぬ改善など非常に多くの文脈に影響が出たことは記憶に新しい。日本社会学会の倫理指針最新版でも、Covid-19のパンデミックを契機の一つとしてオンライン学会の利用の奨励などが行われている。
- 2) 「医制」の立案者である長与専斎も、実際に欧米視察を経ていくつかの問題意識を抱えていた。ここでいう問題意識とは、たとえば欧米圏での衛生文化の効力を高く評価するにしても、それを日本社会に直接輸入した場合に生じうるリスクのことである。在来の漢方医学との間に発生するコンフリクトや、感染症に直接かかわる住民たちのリテラシー（識字能力）の乏しさなどは、感染症（特にコレラ）の伝播速度と致死率を踏まえればたしかに憂慮すべき課題であった。ようするに、衛生文化を当該社会に浸透させるにしても、それを実現するには時間的、人的なコストが多大にかかるため感染症の封じ込めにあたり、見合った成果を得にくいのである。ゆえに、警察行政を中心とする強権的な隔離、消毒アプローチが費用対効果の観点からもやむを得ず採用されてきたのだ。
- 3) 分野はかなり異なるが、画一の疾病を事例に日本社会の心性を活写した研究としては佐藤雅浩（2013）などがある。
- 4) コレラ騒動を扱った研究としては大日方純夫（1978）などがある。大日方の研究は新潟におけるコレラ騒動を事例とし、発足後まもない明治政府が自治体や官僚組織などを利用し自らの支配権を確立していった苦慮の様子などを記述している。
- 5) 長与専斎、後藤新平、森林太郎の三人。
- 6) 感染症と憑依現象の理解については宮前健太郎（2022）を参照。
- 7) アマビエは『肥後国海中の怪』に登場する怪魚であり、疫病から身を守るシンボルとして崇められていた。2020年ごろのコロナパンデミックを境に、いわゆる「アマビエチャレンジ」のような神獣への祈願・法要がSNS上で盛んに

行われるようになってきたが、山梨県立博物館がこれに習い「ヨゲンノトリ」の祈願などを呼びかけると瞬く間に話題になっていった。同博物館によって公表されているだけでも、「ヨゲンノトリ」が印字された商品は189種類に及ぶ。こういった諸記録からも、感染症と架空の生物への祈祷という現象が極めて現代的な出来事であることがわかる。

[文献]

- 安保則夫, 1989, 『ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム——社会的差別形成史の研究』, 学芸出版社.
- 小野芳朗, 1997, 『〈清潔〉の近代「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ』, 講談社.
- 大日方純夫, 1976, 「コレラ騒擾」をめぐる民衆と国家, 『民衆史の課題と方向』民衆史研究会編, 235-252.
- 金川英雄, 2020, 『感染症と隔離の社会史——避病院の日本近代を読む』, 青弓社.
- 小林丈広, 2001, 『近代日本と公衆衛生——都市社会史の試み』, 雄山閣.
- 宝月理恵, 2010, 『近代日本における衛生の展開と受容』, 東信堂.
- 見市雅俊, 1990, 『青い恐怖 白い街 コレラ流行と近代ヨーロッパ』, 平凡社.
- 宮前健太郎, 2021, 「大日本私立衛生会と「清潔」の啓発活動」『社会学ジャーナル』46: 21-32.
- , 2022, 「『安政箇癩流行記』にみる伝染病体験」『社会学ジャーナル』47:51-60.
- 朴炳道, 2021, 『近世日本の災害と宗教 一呪術・終末・慰霊・象徴—』, 吉川弘文館.
- 佐藤雅浩, 2013, 『精神疾患言説の歴史社会学「心の病」はなぜ流行するのか』, 新曜社.
- 申東源, 2015, 『コレラ, 朝鮮を襲う——身体と医学の朝鮮史』, 法政大学出版局.
- 杉山弘, 1988, 「覚書・文明開化期の疫病と民衆意識」『自由民権』2: 11-27.
- 鈴木則子, 2022, 『近世感染症の生活史 医療・情報・ジェンダー』, 吉川弘文館.
- 竹原万雄, 2020, 『近代日本の感染症対策と地域社会』, 清文堂出版.
- 立川昭二, 1971, 『病気の社会史 文明に探る病因』, 日本放送出版協会.
- 海原亮, 2007, 『近世医療の社会史: 知識・技術・情報』, 吉川弘文館.
- 山本俊一, 1982, 『日本コレラ史』, 東京大学出版会.